

「新精選古典文法 三訂版」内容解説資料

この資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。

東京書籍「新精選古典文法 三訂版」—「精選古典探究 古文編」関連表

※「新精選古典文法 三訂版」の例文(練習問題を含む)のうち、「精選古典探究 古文編 002-903」から採録した例文の一覧。教科書の単元順に、「新精選古典文法 三訂版」と、教科書での掲載箇所をそれぞれ示した。



## I 部

### 1 説話1

#### 十訓抄

[成方といふ笛吹き]

文法書	例文	教科書
P158	いかでこの玉を得( )と思ひて、	P15L12

### 2 歌物語

#### 伊勢物語

[初冠]

文法書	例文	教科書
P43	その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、垣間見てけり。	P18L2
P155	ついでおもしろきことともや思ひ( )。	P19L1
P157	春日の里に領るよしして、狩りにいにけり。	P18L1
P164	昔、男、初冠して、	P18L1

[狩りの使ひ]

文法書	例文	教科書
P155	されど、人目しげければ、えあはず。	P21L7

[小野の雪]

文法書	例文	教科書
P80	比叡の山の麓なれば、雪いと高し。	P24L6
P122	親王、大殿籠らで明かし給うてけり。	P24L2
P128	馬頭なる翁つかうまつれり。	P23L1
P159	大御酒賜ひ、禄賜はむとて、	P23L3

[つひにゆく道]

文法書	例文	教科書
P40	つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを	P25L2
P150	わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、	P25L1
P164	つひにゆく道とはかねて聞きしかど	P25L2

### 3 随筆1

#### 枕草子

[九月ばかり]

文法書	例文	教科書
P36	軒の上などはかいたる蜘蛛の巣のこぼれ残りたるに、	P32L3
P82	人も手触れぬに、ふと上さまへ上がりたるも、いみじうをかし。	P32L7
P154	露の落つるに、枝うち動きて、人も手触れぬに、ふと上さまへ上がりたるも、いみじうをかし。	P32L7
P168	人も手触れぬに、ふと上さまへ上がりたるも、いみじうをかし。	P32L7

[すさまじきもの]

文法書	例文	教科書
P45	方違へに行きたるに、あるじせぬ所。	P33L4
P157	「殿は何にかならせ給ひ( )。」	P34L15

[中納言参り給ひて]

文法書	例文	教科書
P43	「これは隆家が言にしてむ。」とて、笑ひ給ふ。	P36L6
P69	「さては、扇のにはあらで、くらげのななり。」	P36L5
P73	「さては、扇のにはあらで、くらげのななり。」	P36L5
P158	おぼろけの紙はえ張る( )ば、	P36L2
P158	「一つな落とし( )。」	P36L8
P185	「一つな落としそ。」と言へば、いかがはせむ。	P36L8

[雪のいと高う降りたるを]

文法書	例文	教科書
P48	御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。	P37L3
P101	「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」	P37L2
P125	例ならず御格子参りて、	P37L1
P161	雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、炭櫃に火おこして、物語などして集まり候ふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。	P37L1 ~ P37L3
P170	「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」	P37L2
P187	雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、	P37L1

## 4 軍記物語

### 平家物語

#### [忠度の都落ち]

文法書	例文	教科書
P54	「三位殿に申すべきことあつて、忠度が帰り参つて候ふ。」	P44L9
P149	「遠き御守りでこそ候はんずれ。」	P45L10
P159	おろかならぬ御事に思ひ参らせ候へども、	P45L2

#### [壇の浦の合戦]

文法書	例文	教科書
P149	「我と思はん者どもは、寄つて教経に組んで生け捕りにせよ。」	P51L13

### 建礼門院右京大夫集

#### [この世のほか]

文法書	例文	教科書
P149	「光源氏の例も思ひ出でらるる。」	P54L5

## 5 随筆2

### 方丈記

#### [安元の大火]

文法書	例文	教科書
P18	あるいは煙にむせびて倒れ伏し、あるいは炎にまぐれてたちまちに死ぬ。	P58L9
P18	一夜のうちに塵灰となりき。	P58L3
P169	あるいは炎にまぐれてたちまちに死ぬ。	P58L9

#### [日野山の閑居]

文法書	例文	教科書
P21	春は藤波を見る。	P61L16
P67	すなはち、和歌、管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。	P61L5
P117	おのづから短き運を悟りぬ。すなはち、五十の春を迎へて、家を出でて、世を背けり。	P60L2
P158	もし心になはぬことあら( )、	P60L11

### 徒然草

#### [悲田院の堯蓮上人は]

文法書	例文	教科書
P47	吾妻人こそ、言ひつることは頼まるれ、	P63L2
P148	「(都の)人の心劣れりとは思ひ侍らず。」	P63L4

[世に従はん人は]

文法書	例文	教科書
P25	夏果てて、秋の来るにはあらず。	P65L7

[あだし野の露消ゆる時なく]

文法書	例文	教科書
P78	長くとも、四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。	P67L4
P148	夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。	P66L3
P149	住み果てぬ世にみにくき姿を待ちえて、何かはせん。	P67L3
P155	命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。	P66L3
P156	命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。	P66L3
P156	飽かず、惜しと思はば、千年を過ぐすとも、一夜の夢の心地こそせめ。	P67L2
P157	もののあはれも知らずなりゆくなん、( )。	P67L8

[花は盛りに]

文法書	例文	教科書
P32	たれこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情け深し。	P68L1
P43	「この枝、かの枝散りにけり。」	P68L6
P60	殊にかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。	P68L6
P87	よろづのことも、始め終はりこそをかしけれ。	P68L8
P88	月は隈なきをのみ見るものかは。	P68L1
P99	心あらん友もがなと、都恋しうおぼゆれ。	P69L1
P148	咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。	P68L2
P156	花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。	P68L1
P156	歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ」とも、	P68L3
P167	「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」	P68L6
P168	「この枝、かの枝散りにけり。」	P68L6

## 6 日記1

### 更級日記

[門出]

文法書	例文	教科書
P46	額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。	P79L4
P61	「京に疾く上げ給ひて、物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ。」	P78L7
P117	「物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ。」	P78L8
P125	薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、	P79L4
P133	身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、	P78L8
P135	薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、	P79L4

P157	あづまぢの道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。	P78L1～ L6
P157	日の入り際の、いとすごく霧りわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まには参りつつ、額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。	P78L11

[物語]

文法書	例文	教科書
P64	紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず。	P80L2
P77	これを見るよりほかのことなければ、	P81L2
P82	母、物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。	P80L1
P93	引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。	P80L14
P97	「いとつくしう生ひなりにけり。」など、あはれがり、めづらしがりて、	P80L8
P100	我はこのごろわるきぞかし、	P81L5
P115	「何をか奉らむ。」	P80L9
P146	夢に、いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻を疾く習へ。」と言ふと見れど、	P81L3
P167	かたちも限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、	P81L6

蜻蛉日記

[なげきつつひとり寝る夜]

文法書	例文	教科書
P187	さればよと、いみじう心憂しと思へども、	P82L9

[あまぐもにそる鷹]

文法書	例文	教科書
P108	「さて鷹飼はでは、いかがし給はむずる。」	P84L9
P185	「いかがはせむ。かたちを変へて、世を思ひ離るやとこころみむ。」	P84L5

7 作り物語1

源氏物語 (一)

[光源氏の誕生]

文法書	例文	教科書
P29	取り立ててはかばかりしき後ろ見しなければ、	P89L8
P30	同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。	P88L3
P32	いよいよ飽かずあはれなるものに思ほして、	P88L6

P43	楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、	P88L10
P72	いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。	P88L1
P77	同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。	P88L3
P82	急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなる児の御かたちなり。	P89L14
P95	世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ給ひぬ。	P89L12
P96	朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、	P88L4
P97	取り立ててはかばかしき後ろ見しなければ、	P89L8
P127	疑ひなき儲けの君と、世にもてかしづき聞こゆれど、	P90L1
P129	いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、	P88L1
P135	いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、	P88L1
P139	前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ給ひぬ。	P89L11
P160	いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、	P88L1
P162	いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。	P88L1
P163	取り立ててはかばかしき後ろ見しなければ、	P89L8
P185	いつしかと心もとながらせ給ひて、	P89L13

[若紫]

文法書	例文	教科書
P34	「いで、あな幼や。」	P92L13
P34	「梳ることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。」	P94L4
P60	簾少し上げて、花奉るめり。	P91L10
P69	少しおぼえたるところあれば、子なめりと見給ふ。	P92L6
P72	「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠のうちに籠めたりつるものを。」	P92L7
P75	「いづ方へかまかりぬる、いとをかしうやうやうなりつるものを。」	P92L10
P76	「何ごとぞや。童べと腹立ち給へるか。」	P92L6
P81	「梳ることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。」	P94L4
P82	「罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」	P92L14
P83	簾少し上げて、花奉るめり。	P91L10
P85	「伏籠のうちに籠めたりつるものを。」	P92L8
P87	烏などもこそ見つけ	P92L10
P88	「童べと腹立ち給へるか。」	P92L6
P97	「今日しも端におはしましけるかな。」	P94L14
P98	かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや、	P95L9
P117	かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。	P91L8
P127	「罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」とて、	P92L14
P130	「源氏の中将の、瘡病まじなひにもし給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。」	P94L15
P131	「この世にののしり給ふ光源氏、かかるついでに見奉り給はむや。」	P95L3
P135	「源氏の中将の、瘡病まじなひにもし給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。」	P94L15

P137	清げなる大人二人ばかり、さては、童べぞ出で入り遊ぶ。	P92L1
P139	ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまり給ふ。	P94L1
P154	かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。	P91L8
P154	「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠のうちに籠めたりつるものを。」	P92L7
P154	いと口惜しと思へり。	P92L8
P155	「いとあやしきさまを人や見つらむ。」とて、	P95L2
P156	あはれなる人を見つけるかな、	P95L6
P158	「いで、あな幼や。」	P92L13
P162	「雀の子を犬君が逃がしつる。」	P92L7
P166	少しおぼえたところあれば、子なめりと見給ふ。	P92L6
P169	明け暮れの慰めにも見ばや、	P95L9
P171	「罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」	P92L14

## 8 歴史物語1

### 大鏡（一）

#### [道真の左遷]

文法書	例文	教科書
P49	明石の駅といふ所に御宿りせしめ給ひて、駅の長のいみじく思へる気色を御覧じて、作らしめ給ふ詩、いと悲し。	P102L15
P159	御前の梅の花を( )て、	P102L3
P187	さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ためによからぬこと出で来て、	P101L8

#### [花山天皇の出家]

文法書	例文	教科書
P66	大臣にも、変はらぬ姿いま一度見え、かくと案内申して、	P110L12
P115	春宮の御方に渡し奉り給ひてければ、	P109L4
P126	東さまに率て出だし参らせ給ふに、	P110L3
P154	土御門より東さまに率て出だし参らせ給ふに、	P110L3
P158	まだ帝出でさせおはしまさ( )けるさきに、	P109L3

## 9 詩歌

### 八代集の世界

文法書	例文	教科書
P43	うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき [古今和歌集]	P116L7
P165	うたた寝に恋しき人を見てしより [古今和歌集]	P116L7

## 歌論

[古今和歌集仮名序]

文法書	例文	教科書
P45	生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。	P125L3
P76	生きとし生けるもの、	P125L3
P88	生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。	P125L3
P90	いづれか歌を詠まざりける。	P125L4

## Ⅱ部

### 2 日記2

#### 和泉式部日記

[夢よりもはかなき世の中を]

文法書	例文	教科書
P158	「かかること、ゆめ人に言ふな。」	P165L11

### 3 作り物語2

#### 源氏物語（二）

[なにがしの院]

文法書	例文	教科書
P46	物に襲はるる心地して、おどろき給へれば、	P175L7
P148	物に襲はるる心地して、おどろき給へれば、灯も消えにけり。	P175L7
P185	「夜の声はおどろおどろし。あなかま。」	P178L9
P185	さこそ強がり給へど、若き御心にて、言ふかひなくなりぬるを見給ふに、	P178L3
P187	汗もしとどになりて、我かの気色なり。	P175L13

[須磨の秋]

文法書	例文	教科書
P53	行平の中納言の「関吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、	P183L9
P76	沖より舟どものうたひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。	P184L11
P148	今宵は十五夜なりけりと思し出でて、	P185L11

[宇治の姫君たち]

文法書	例文	教科書
P155	霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。	P203L8

### 4 歴史物語2

#### 大鏡（二）

[三船の才]

文法書	例文	教科書
P121	入道殿、「かの大納言、いづれの船にか乗らるべき。」とのたまはずれば、	P210L3
P149	入道殿の大井川に逍遥せさせ給ひしに、	P210L1

[肝試し]

文法書	例文	教科書
P27	影だに踏むべくもあらぬこそ	P212L4
P54	「わが子どもの、影だに踏むべくもあらぬこそ口惜しけれ。」	P212L4
P147	「さあらむ所に一人( )むや。」	P213L3
P147	四条大納言のかく何事もすぐれ、めでたくおほしますを、	P212L1
P150	帝、さうざうしとや思し召しけむ、	P212L13
P150	「ただにて帰り参りて侍らむは、証候ふまじきにより、」	P215L7
P155	「今宵こそいとむつかしげなる夜なめれ。」	P213L1

[道長、伊周の競射]

文法書	例文	教科書
P80	「摂政、関白すべきものならば、この矢当たれ。」	P218L2
P80	中心には当たるものかは。	P217L12
P98	「何か射る。な射そ、な射そ。」	P218L5
P124	帥殿の、南院にて人々集めて弓あそばししに、	P217L5
P147	延べさせ給ひけるを、やすからず思しなりて、	P217L9
P160	帥殿の、南院にて人々集めて弓あそばししに、この殿渡らせ給へれば、思ひかけずあやしと、中関白殿思しおどろきて、いみじう饗応し申させ給うて、下臈におはしませど、前に立て奉りて、まづ射させ奉らせ給ひけるに、帥殿の矢数いま二つ劣り給ひぬ。	P217L5 ~L8

[大納言殿参り給ひて(枕草子)](〈言語活動〉伊周の人物像を読み比べる)

文法書	例文	教科書
P62	御前なる人々、一人二人づつ失せて、	P220L5

[隆家と道長]

文法書	例文	教科書
P123	さし置かれつる杯取り給ひてあまた度召し、	P223L8

## 5 評論

### 俊頼髓脳

[鷹狩りの歌]

文法書	例文	教科書
P150	まことにもおもしろかりけむとおぼゆ。	P229L5

## 無名抄

### [おもて歌のこと]

文法書	例文	教科書
P125	俊恵言はく、「五条三位入道のみもとにまうでたりしついでに、」	P230L1
P129	「これをなむ、身にとりておもて歌と思ひ給ふる。」	P230L5
P134	「これをなむ、身にとりておもて歌と思ひ給ふる。」	P230L5
P149	それをば用ゐ侍るべからず、	P230L3

## 無名草子

### [紫式部]

文法書	例文	教科書
P161	「繰り言のやうには( )ど、尽きもせず、うらやましく、めでたく( )は、大斎院より上東門院へ、『つれづれ慰みぬべき物語や( )。』と尋ね参らせさせ給へりけるに、紫式部を( )て、『何をか( )べき。』と( )られければ、『めづらしきものは、何か( )べき。新しく作りて参らせ給へかし。』と( )ければ、『作れ。』と仰せられけるを( )て、源氏を作りたりけるとこそ、いみじくめでたく( )。』と言ふ人侍れば、	P236L1 ～L7

## 10 古典の注釈

### 小倉百人一首の注釈を読む

文法書	例文	教科書
P35	瀬をはやみ岩にせかる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ [出典は詞花集]	P300L15